

# 日本建築史

## 序説

太田博太郎著

増補第三版 彰国社刊



西本願寺唐門扉

## はしがき

日本建築史の概説書としては、すでに天沼・関野・足立博士などのものがあるが、現在ではいずれも手に入れることは不可能に近い。しかも、もし入手できたとしても数年前のものであるから、最近の研究の成果が取り入れられていないため、読者の要求を十分満たしえない。この需要に応ずるためには、もっと詳しい建築史の著述が必要なのであるが、その執筆には非常に長い年月を要するので、とりあえず、簡略に日本建築史の概要を述べたものとして、本書を出版することとした。

本稿を初めて書いたのは、昭和十四年のことであって、なくなった足立博士のお薦めによるものであった。学窓を出て間もない私にとって、それは非常な重荷であったが、一年ばかりかかってようやく書き上げ、先生の御校閲を受けるためお宅へ持参した。お宅を辞したのは夜十二時過ぎであったが、翌日午後早速電話で呼び出され、間違っているところ、疑問の箇所、足りない点などをこまごま指摘して下さった。博士が後輩の指導に熱心であられたことは非常なもので、私などしばしば御注意をうけたのであったが、まさか徹夜して読んで下さるとは思わなかったもので、その有難さがひとしお身にしみて感じられた。事情があつて原稿はそのまま活字とはならなかったが、その後、機会あるごとに取り出して手を入れ、そのたびに博士に対する感謝の念を新たにしたのであった。

戦争も終つて気持も多少余裕ができ、いつかは出版したいと思つていたので、再び重要な論文を讀

み返し、書き直し始めたのは今年の正月であった。それから一年近く、ほとんどこの仕事にかかりきりであったが、筆者の不敏のため、なかなか思うようにできあがらず、いたずらに机に向って苦しむばかりであった。しかしいつまで直してもはてしがないので、不満足ながら、この程度にとどめ、あとは次の機会に譲ることとした。

旧稿の書き直しであるため、前後の体裁が一貫していない憾みがあるが、新しい研究が出るたびに訂正していったので、それはある程度やむを得ないところであった。挿図は印刷の都合上、必要欠くべからざるものうち、一般にあまり用いられていないもののみを採ったから、重要なもので省略したものも多い。なお明治以後の分は著者の研究が浅いので、ここでは省略した。

本書を成すにあたり、主として参考にしたのは関野克・福山敏男・足立康・大岡実・竹内理三・浅野清・服部勝吉・豊田武・遠藤元男・堀口捨己・大熊喜邦諸氏の論著であった。煩を避けて文中にいちいち註記しなかったが、ここに記して感謝の意を表する。

昭和二十一年十月十七日

太田 博 太郎

## 増補第二版の刊行にあたって

本書の初版が出たのは昭和二十二（一九四七）年九月である。当時は戦後すぐの、物のない時代であったから、用紙もその例に洩れず、古紙を再生した、ざらざらの黄ばんだ仙花紙で、印刷用紙といえるたぐいのものではなかった。初版の「はしがき」の日付が昭和二十一年十月とあることから分かるように、B6判一五二頁の小冊子の印刷に一年近くかかっており、印刷すること自体、大変困難な時代であったことを思わせる。このような状態であったから、口絵や挿図の写真は不鮮明で、本とはいえないような代物であった。しかし、他に類書がないこともあって、幸いに版を重ねた。

戦後、次第に研究者がふえ、研究は非常な発展をみせたので、本書も訂正増補する必要が出てきた。それで初版刊行後十五年たった昭和三十七年に不十分ながら、本文・口絵・挿図の改訂増補を行った。本文は二十一節だったのを二十九節とし、口絵は倍に、挿図は三倍にした。それとともに昭和二十九年に出版した『日本の建築』が絶版になっていたので、そのなかの「日本建築の特質」を巻頭に入れ、総論とした。また本文は短く、これだけでは説明が足りないため、明治以来の論著の主要なもの目録をつけ、それに解説を付して「日本建築史の文献」と名づけ、付載した。それは本文の補助としてだけでなく、さらに進んで勉強する人の手引としたいと考えてのことであった。この文献目録は増刷するたびに補遺を加えていったが、昭和四十三年には補遺を文献目録の本文に繰り入

とになろう。これ以後の平成時代に入ってからの研究状況は、建築史学誌の学界展望欄などを参照されたい。

平成二十年九月四日

藤井 恵介

## 目次

I	日本建築の特質	一
一	日本の自然と社会	三
二	外来文化の受容と伝統の維持	七
三	日本人の建築観	三
四	日本建築の材料と構造	一六
五	日本建築の意匠	二六
II	日本建築史序説	四
	古 代	
一	竪穴と高床	四
二	神社建築の発生	四
三	仏教建築の伝来	五
四	仏教建築の発展	三

五	密教建築の特徴	七
六	神社建築の発達	六
七	浄土教建築の流行	七
八	建築様式の日本化	六
九	造寺司と木工寮	六
一〇	寢殿造の完成	六
	中世	一〇三
一一	大仏様と重源	一〇三
一二	禪宗様の伝来	一〇六
一三	禪宗建築の発展	一一三
一四	和様の伝統	一二七
一五	新様式と和様	一三三
一六	建築業者の座	一二六
一七	中世建築の構造と意匠	一三三
一八	寢殿造から書院造へ	一三九
一九	地方建築界の興隆	一四九
	近世	一五
二〇	新しい建築、新しい生産様式	一五

一一	城郭建築の勃興	一五
一二	書院造の発達	一六
一三	茶室の発生	一七
一四	書院造の普及	一七
一五	近世の工匠	一七
一六	都市の発達	一八
一七	市民社会の建築	一八
一八	町家と農家	一八
一九	洋風建築の伝来	一九

III	日本建築史の文献	一九
-----	----------	----

一	論著目録	一九
二	概説書	一九
三	シナ・朝鮮との関係	二四
四	術語解説	二六
五	建造物の目録と図録	二八
六	構造と意匠	三三

七	建築生産	三二五
八	住宅建築(一) 概説、古代	三三〇
九	住宅建築(二) 中世および近世	三三七
一〇	茶室と民家	三四〇
一一	神社建築	三四一
一二	寺院建築(一) 総説および飛鳥奈良時代	三五七
一三	寺院建築(二) 平安時代	三五九
一四	寺院建築(三) 中世および近世(靈廟建築を含む)	三六九
一五	城郭および都市	三七四
一六	学校・劇場その他	三八
一七	明治建築	三八一
一八	保存問題	三八五
一九	史料の探し方	三八六

#### IV 続 日本建築史の文献

一	論著目録	三九五
---	------	-----

二	概説書(二分野以上にわたる論文集を含む)	三九七
三	シナ・朝鮮	三〇三
四	術語解説	三〇五
五	建造物の目録と図録	三〇六
六	構造と意匠(建築の部分、木割を含む)	三〇七
七	建築生産	三三三
八	住宅建築(一) 概説、古代(宮殿・官衙を含む)	三三八
九	住宅建築(二) 中世および近世	三三三
一〇	茶室と民家	三三六
一一	神社建築(近世社寺建築報告書は省略)	三三三
一二	寺院建築(一) 総説および飛鳥奈良時代	三三五
一三	寺院建築(二) 平安時代	三四三
一四	寺院建築(三) 中世および近世(靈廟建築を含む。近世社寺建築調査報告書は省略)	三四五
一五	城郭および都市(農村集落も含む。ただし集落町並調査報告書は省略)	三四八
一六	その他	三五六
一七	明治建築	三五七
一八	保存問題	三五四
一九	辞典・年表	三五六
二〇	建築史学史	三六七

一一 国宝・重要文化財建造物修理工事報告書目録補遺（昭和四十四年以後、県別）……………三六  
写真撮影・提供者……………三七

# I 日本建築の特質

藤原頼通の建てた平等院鳳凰堂は、「極楽疑わしくば宇治の御寺をうやまえ」といわれ、極楽世界をこの世に現出させたものとして、当時の人々にたたえられたものであったが、藤原氏がその財力を傾けたこの建物、平安時代人の理想とした極楽世界も、天地を圧し、天地に広がる大建築ではなく、宇治川のほとりの微々たる小建築にすぎない。鳳凰堂で求められたものは、表現の大きさではなく、量感でもなく、優しさと感覚の洗練さであった。限られた小世界のうちにおいて、あくことなき感覚の洗練がその目標である。平安時代はこの傾向がとくに強く表われたときで、道長の法成寺無量寿院の建築をたたえる言葉には、「東大寺は仏ばかり大きくおわしますめれど」といって、東大寺の大建築であることよりも、無量寿院の洗練された美しさをほめ、堀河殿については、その庭園の美しさを「いわんかたなくおかし」といつている。またあるときは「善を尽くし、美を尽くし」と称して、大きさ、量感などに対する褒め言葉を残していない。

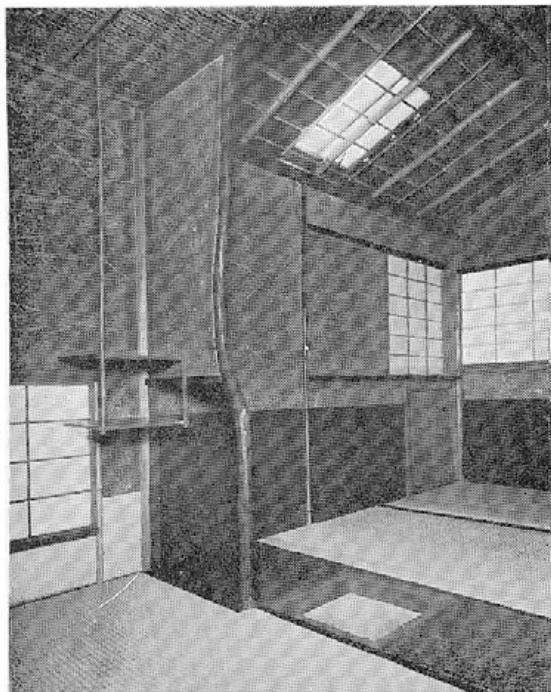
このような限られた世界において、あくまで美を追求した代表的な例は茶室であろう。そこに造られる空間は、わずか三坪に足りない広さである。その三坪に足らぬ小天地のうちにおいて、数限りない変化が考えられている。このような小さな建物においては、材料の美しさは極度に要求される。ささいな材料の疵も、はなはだしい目障りとなる。そこで人々に迫る力強さは、物の大きさ、量の大きさによる強さではなくて、建築家の美に対する研ぎすまされた感覚が一つの力として迫ってくる。

このようにいったとて、雄大な気分が日本建築のうちにまったくなかったのではない。あたかも、



上 桂離宮松翠亭

下 大徳寺玉林院眞庵





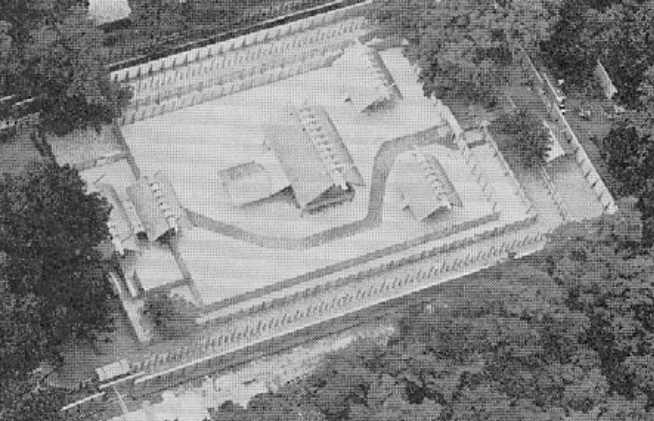
て、細部においては多少変化しているが、正倉院文書および八〇四年<sup>延暦</sup>の「皇太神宮儀式帳」に記す当時の状態と、現在のそれとは大差なく、飾金具や高欄などの復原によって、容易にその姿を再現することができる。そしてこの奈良時代における状態は、さらに古い時代の形式を伝えているものと考えられる。

外来文化の急速な摂取発展が行われる一方、数十回の造替が繰り返されたにもかかわらず、伝統的なものがそれと併行して保存されて来たということは、日本文化の著しい特色の一つである。

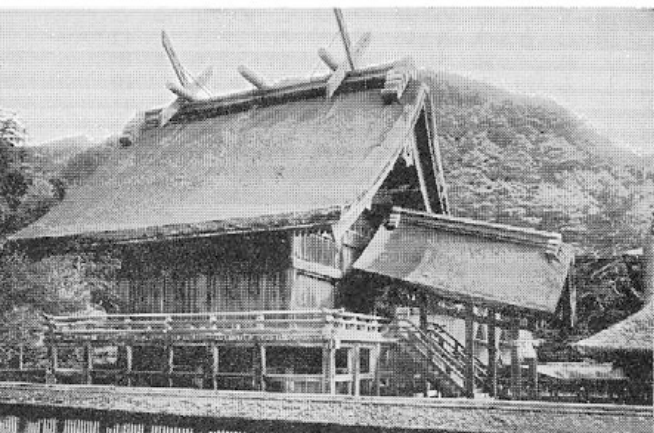
屋根に反りのない切妻造平入の本殿を神明造と呼ぶ。伊勢神宮のそれは、他の神社で真似できないものとして、とくに唯一神明造という。正殿は正面三間、側面二間の平入、切妻造、カヤ葺の簡素なもので、柱を掘立てとし、ユカを高く張り、破風は屋根を貫いて千木となつて高く聳え、棟に勝男木を載せる（ここにいう一間、二間とは「二間を六尺」という長さでなく、柱間がひとま、ふたまという柱間の数を指す。以下同様）。曲線の使用は全くなく、直截簡明な構造意匠である。ここに使われた材料はごく普通の、自然そのままの材料で、その材料の性格は十分に理解され、その特質は遺憾なく發揮されている。この建物における素材さは、すぐれた感覚によって洗練され、日本建築の特質である「清純」さはこの神殿によってまさに代表される。

生い茂った杉木立の神域のうち、木の香新たな白木の神殿は、その飾り気のない素材さのゆえに、建築と環境との一致を如実に示しているのである。

この神殿はたしかに素材ではあるが、これをもって構造の真のみを求めた結果の美しさとするこ



伊勢神宮内宮



出雲大社本殿



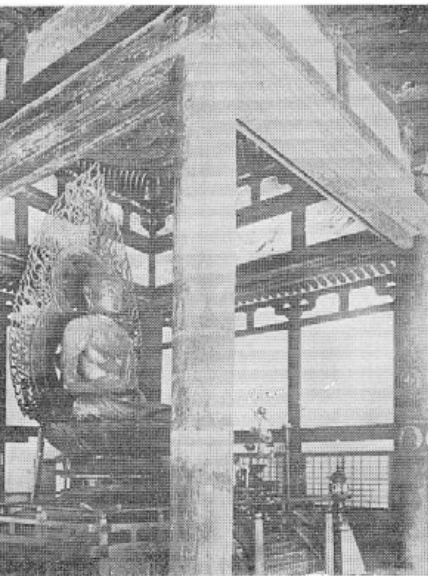
住吉大社本殿

寺も、いまは貴族の別荘として営まれるようになった。藤原氏の富と勢威とを尽して法成寺が造立された。

法成寺は金堂を中心に左に五大堂、右に阿弥陀堂（無量寿院）があり、講堂・薬師堂・三昧堂・十齋堂・釈迦堂・観音堂・塔・円堂・真言堂・東北院・総社・経藏・鐘楼・戒壇・両法華堂・南楼・宝藏など「御堂あまたにならせ給うままに、浄土はかくこそと見ゆる」（物語）盛観であった。中にも九体の阿弥陀を安置した無量寿院は、その最も莊嚴を極めたところで、「まずはつくらせ給える御堂のありさま、鎌足のおとどの多武峯、不比等大臣の山階寺、基経おとどの極楽寺、忠平おとどの法性寺、九条殿の楞嚴院、あめのみかどのつくり給える東大寺も、仏ばかりこそはおおきにおわしますめれど、なおこの無量院にはならび給わず、まして余の寺々はいくべきにあらず……南京のそこばく多かる寺ども、なおあたり給うなし」（鏡大）という壯観であった。

藤原時代に入つて貴族の信仰は密教から浄土教へと移つて行つた。しかしながら、彼らは信仰によつて浄土に往生する前に、華麗な堂塔を造り、彩色と螺鈿（らでん）によつて莊嚴された本堂に、金色燦然たる阿弥陀如来を安置し、並び建つた堂宇は池にその影を写し、「極楽浄土この世に現われにけりと見えた」（鏡大）。現世における浄土の幻影の中にその身を入れ、法悦に浸つたのであった。「説経師は顔よき、つとまもらえたるこそ、その説く事の尊とさも覚ゆれ」（枕草）という感覺的要素の重要視された当時であつて、このような傾向の生じたのは当然であらう。

「今年始めて末法に入る」（三）という末法思想は造寺造塔に拍車をかけ、法成寺について、平等院・



上 平等院鳳凰堂

下右 同

下左 法界寺阿弥陀堂